



2024 TOGO in Chicago

2024国際交流プログラム報告書 統合デザイン学科

October, 2024

2024年9月4日～9日まで、統合デザイン3年生7名を引率し、米国シカゴへ4泊6日の国際交流活動を実施した。

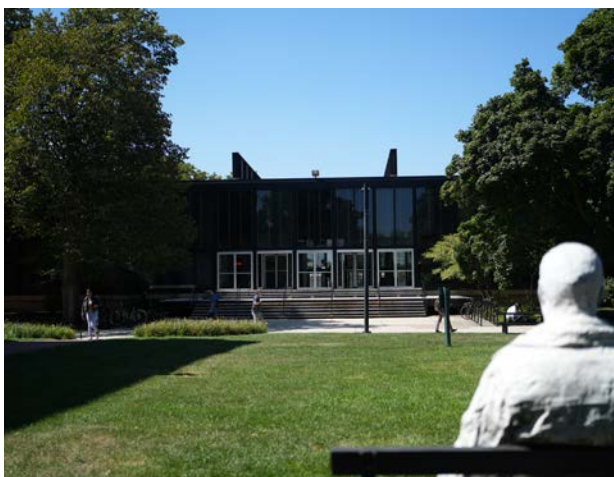
今回の交流活動は、米国の社会課題に対するデザインの取り組みを理解し、学生のデザインに対する視野を広げるとともに、最新の米国のデザイン事情を学ぶことを目的とした。

Day1: 9/4



シカゴに到着した午後、早速最初の目的地であるイリノイ工科大学のInstitute of Design (ID)を訪れた。市の南に位置するメインキャンパスは、ミース・ファン・デル・ローエの建築でも知られる。IDの拠点はミースの建築ではないが、開放的で明るいアイコニックな建物だ。

Maura Shea准教授に温かく迎えられ、爽やかな秋の気配がただよぶ学内のテラス席で、学生たちは旅の疲れもみせず和やかに用意いただいた昼食を囲んだ。



その後、Anijo Mathew学科長の案内で、学内を案内していただいた。ニュー・バウハウスとしての歴史をもつIDは、世界で初めてデザイン学のPhDプログラムを提供した学校である。デザインの役割が時代とともに変化するなかで、バウハウスのDNAを継承しつつ、人間中心デザインやデザインメソドロジーのアプローチを時代に合わせアップデートし、教育の場に反映させていることなどを説明いただいた。



教授陣が中心となり、それぞれの研究を学生とともにやるAction Labsの活動も”Equitable Healthcare Lab” “Food Systems Lab” “Sustainable Solutions Lab” “Net Positive Behavior Lab” といったテーマごとに積極的に行われている。そのうち、Food Systems LabでWeslyne Ashton教授らから、現在取り組んでいるプロジェクトについて詳しく伺った。



また、IDの一角をお借りして、シカゴを拠点としたデザイン事務所のGreater Good Studioの共同創設者George Aye氏との意見交換を行った。デザインを通じた社会変革に取り組むAye氏からは、デザインの依頼者自身が問題の根源を作っている場合にはその依頼を受けないという姿勢で取り組んでいることなど、よりよい未来をつくるためのデザイナーの関わり方や活躍の可能性について、新鮮な視野を学生に提供していただいた。

Day2: 9/5



2日目は、デザイン思考を通じて数々のイノベーションを世の中に送り出してきたデザインファーム・IDEOのシカゴオフィスを訪ねた。「アンタッチャブル」など数多くの映画のロケ地となったユニオン駅からほど近くに位置する。そのエレベーターホールで、モーションセンサーを活用したシカゴの交通システムをモチーフとしたサインに出迎えられた。

まずIDEOのアプローチについて、プロジェクトの事例を交えながら紹介していただいたのち、オフィスツアーでは、IDEOの文化に欠かせないキッチン、ラピッドプロトタイプを作るショップや





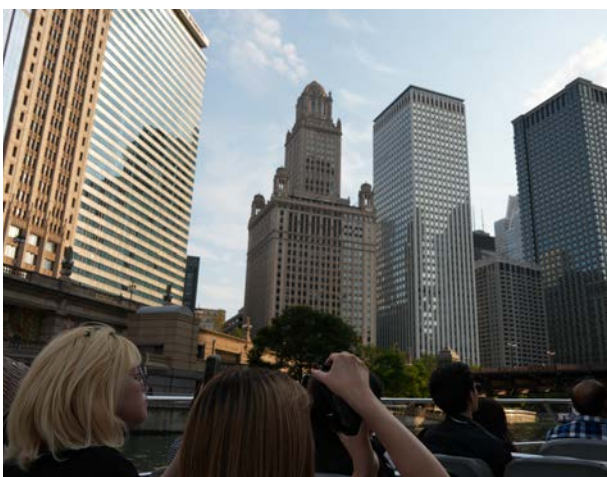
実際のプロジェクトで作られた様々なプロトタイプなどを紹介いただき、学生は活発に質問を投げかけていた。

そして人事担当の方からは、デザイン業界で職を求める際に意識するとよいポイントについてのアドバイスもいただき、ちょうど就職活動が本格化する学年でもあり、真剣に耳を傾けていた。

昼食がてらIDEOのオフィスから足を延ばし、マクドナルドのグローバル本社に併設されているカフェに立ち寄った。ここでは世界中のマクドナルドで提供されているローカルメニューをアメリカに居ながらにして楽しむことができる。そのオペレーションのスムーズさや旗艦店ならではのサービスなども含めて貴重な体験となった。



マクドナルド本社をあとに向かったのは、ダウンタウンにあるDesign Museum of Chicagoである。デザインを通じてインスピレーションを与え、教育し、イノベーションを育成することをミッションとしたミュージアムで、2012年にポップアップ展示会の活動から始まった。そのうち、2014年にクラウドファンディングにより美術館の通年運営に必要な資金を調達して以降、現在のギャラリーで多くの展示会や公開プログラムを公開している。ユニークなイマージョンプログラムを提供するMurmur Ringの共同設立者で、ミュージアムのボードメンバーでもあるAshley Lukasik氏らからミュージアムのミッションなどについて説明をうけ、「デザイン」が定義するものや、「デザイナー」の役割などについて視野を広げる機会をいただいた。



その後、クルーズを利用して市内の有名建築を巡り、1日の締めくくりとして名物のシカゴピザを体験するなど、学生たちは疲れた様子を見せることもなく、精力的な学びの1日となった。

Day3: 9/6

この日はシカゴの南に活動の場を移し、まずフランク・ロイド・ライトの設計したロビー邸のツアーに参加した。日本とも縁の深いライトの作品の説明に、興味津々で聞き入る姿が印象的であった。

またロビー邸のほど近くに位置するシカゴ大学のキャンパスを散策し、思い思いにアメリカのキャンパスライフを垣間見ながら時間を過ごした。中には徒歩30分ほど先にあるシカゴ科学産業博物館まで足を延ばした学生もあり、限られた時間を積極的に活用しようとする姿がみられた。



その後、さらに南にあるGary Comer Youth Center (GCYC)を訪ねた。アパレル会社のLands' Endの創設者である

Gary Comer氏は長年にわたる慈善活動家で、その出身地Greater Grand Crossing地区に設立された中学校と高校の中核施設がGCYCである。ここでの創造的なプログラムを通じて、地域の子供達の学業での成功、充実した学習、大学や職業への準備の提供を目指している。



こちらでは冬季を除いてファーマーズマーケットが開催されており、プログラムに参加する学生やプログラムスタッフが、幹線道沿いの農場や屋上庭園において販売される農作物を育て収穫している。土壌を疲弊させないための工夫などをしながら、手塩にかけて育てている農作物は地域の人々にも人気で、この日も馴染みの顔ぶれが出入りしている様子だった。学生たちも何種類もの甘くてみずみずしいミニトマトを試食させていただいたり、鶏に餌を与えたりしながら、生産に関わったスタッフの方々と交流を深めていた。



この日は暑さがぶりかえしたこともあり、自然と温暖化に関する質問が学生から出された。やはりシカゴでも異常な暑さの日や、年間を通して気温が下がりきらない日が増え、農作物にも影響が出ているとのことだった。

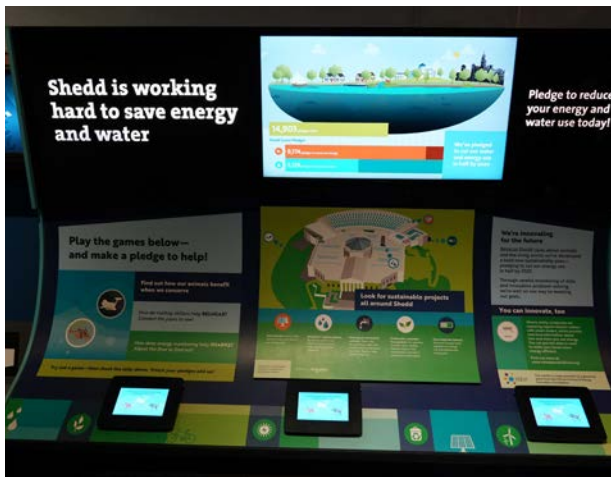
地域に根ざした活動を通じた循環型の社会貢献や、気候変動問題といった社会課題に対し、デザイナーとして取り組めることはなにか、などといったことを考える機会を得ただけでなく、年齢の近いGCYCのスタッフたちと、共通の話題を通じて交流を深める貴重な経験となった。



Day4: 9/6



活動の最終日は、サステナビリティに関する取り組みを積極的に行っているシェッド水族館を訪問し、訪問者にその試みをどのように伝達する工夫をしているか、展示のデザインやコミュニケーションの方法などに着目して見学を行った。過去にはイルカショーなどに使われていたプールの周辺に観客を集め、水産資源の枯渇問題に触れ、カリフォルニアのモンレーベイ水族館のSeafood Watchプログラムとの提携を紹介するなど、水族館自体の役割の変化を実感する内容であった。



最終日の午後はそれぞれがシカゴでの残された時間を満喫できるよう自由行動とした。コミュニティイベントに参加したり、美術館を訪れたり、シカゴ・カブスの試合を観戦したり、目抜き通りの散策を楽しんだり、ローカルスーパーを覗いたり、思い思いの方法でシカゴの街にしばしの別れを告げていた。

参加学生	引率教員
方山実結	詫摩智朗
小磯花恵	佐々木千穂
清川友里加	
宮田小春	
大野白龍	
鈴木麗加	
檜山愛華	
(順不同)	